

調査の実施にあたって

このところ、新聞紙上に死を急ぐ子どもたちのニュースが伝えられることが多い。はじめ、病理の世界の現象だと信じていた筆者も、そうした事例を耳にするにつれて、病理のもつ層の深さや広さを感じるようになった。

昭和52年、文部省の実施した学習塾に関する調査によると、中学生の通塾率は、一年生38%、二年生39%、三年生37%に達するという。全国平均で、10人中4人の生徒たちが、塾通いをしている事実は、中学教育の危機を象徴する現象であろう。

いうまでもなく、現行の6、3制学校制度は、第二次大戦後の混乱期に、占領軍の強力な指導のもとに誕生した。同じ時期に実施された教育委員会制度や指導要領などのいわば「アメリカ教育の輸入プロジェクト」が、歳月の経過とともに、換骨奪胎されて、日本化の歩みをたどったのに、（新制）中学の構想だけは、多くの障害を乗り越えて、すっかり定着した感が強い。

しかし、本来、中学校は、多感で、心理的な振幅の大きい青年期前期の子どもたちを対象にしており、ただでさえ困難な教育課題を内包している。加えて中学は、共通教育の性格を固持できる小学校と違って、高校・大学へ通じる個別化された教育一具体的には、進路選択一を配慮する責務を担っている。三年間の課程を通じてマスとして受け入れた生徒を、個別化してアウトプットするのであるから、当然、多くの隘路が予想されよう。

つきつめていうと、現在の教育問題の火中に、中学校は位置している。非行、落ちこぼれ、やる気のなさ、体力の低下、受験競争などが、その一例である。

中学教育が、そうした混沌とした状況を続けているのに、中学教育を正面から分析した研究データに乏しい。小学生の場合なら、素直な子どもらしい反応を期待できるし、高校生、大学生は、成人の調査と同じような個人としての意見が望める。しかし、中学生は、この年齢に特有ないたずらっ気や權威に対する反発から、信頼をおきうるデータの収集が困難なのではないか。そうした危惧が、中学生を対象とした調査の不毛さを招いたように考えられる。

そうした懸念は残るにせよ、生徒たちの心の内をふまえて教育論を構想する必要を感じ、中学生の意識調査を試みることにした。さいわい、中学の先生方の協力を得て、順調にデータの収集をすることができた。本調査にご協力をいただいた各中学の先生方、そして、生徒諸君に感謝する次第である。

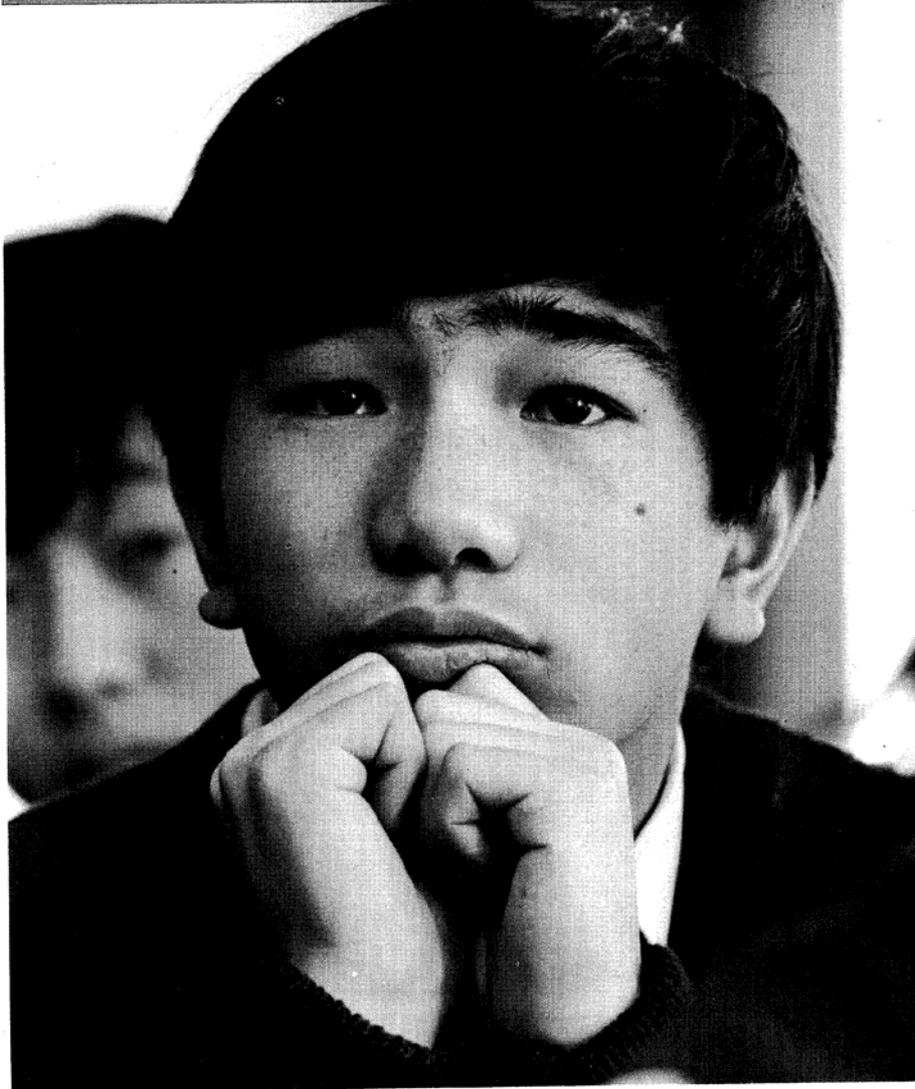
それと同時に、教育産業にたずさわる責任を痛感され、中学生の意識に立脚した教材作りを目指すために、全面的に援助、協力をしていただいた株式会社福武書店社長・福武哲彦氏はじめ、福武書店の方々に感謝の気持ちを表しておきたい。なお調査実施にあたっては、通信教育部指導部長・加藤智禧氏、調査室担当の橋口陽子氏などの協力を得た。また、データの集計、解析にあたって、千葉大学専任講師・明石要一氏の協力を仰いだ。

昭和53年3月

奈良教育大学教授・教育学博士

深谷昌志

I 章 学校とは何か



1 調査票の構成

昨年7月、名古屋で開催された日本教育学会では、「学校とは何か」と題されたシンポジウムが持たれ、全国の教育研究者が、終日、熱心な討議をくりひろげた。

提案者のひとりとして、筆者は、小学生を対象に、学校観を分析する調査結果を発表した。その中に学校生活を16に分け、それぞれの楽しさを尋ねたデータがある。それによると、学校の中で、子どもたちのあげた楽しい時間のベスト4は、以下の通りであった。

第一位 昼休み 第二位 授業の終わったあと

第三位 体育の時間 第四位 図工の時間

念のため、楽しさに欠ける、つまり、ワーストも紹介しておこう。

第十六位 掃除の時間 第十五位 児童会の時間

第十四位 国語の時間 第十三位 授業の始まる前

子どもたちは昼休みや授業の終わったあと、そして、手足を自由に動かせる体育や図工の時間が楽しく、授業の始まる前や、算数や国語の時間が苦痛だという。

いうまでもなく、学校は、学習を目的として成り立っている。しかし、主目的ともいうべき活動に楽しみが見いだせず、副次的な機能に人気が集中している。ここに、地盤沈下を続ける学校の苦しい状況が象徴的に表れている思いがする。

本調査実施にあたっては、中学生にとって、学校が楽しい場かどうかを分析の中心テーマに据えることにした。

調査票の構成は、以下の通りである。

- ① 学校生活を10の領域に分け、7段階評価で、楽しさに対する評価を求める
- ② 時間に余裕が生まれたら、何に、その時間を使うのかを、10の活動に分けて、意欲の有無を5段階評価で尋ねた
- ③ 将来の生き方として、7つのタイプを提示し、そうした生き方をしたいかどうかを5段階評価で求めた
- ④ 英語、数学など、9教科の学業成績の現状と成績期待
- ⑤ 家庭学習の仕方
- ⑥ 学習塾通いの有無と塾通いのイメージ
- ⑦ 通信教育学習に対する評価
- ⑧ その他、フェース、シートにあてはまる項目

また、調査校としては、東京都の公立中学4校を選んだ。しかし、学校差が少なかったため、以下の分析ではすべてのデータを同一サンプルとして扱うことにした。なお、有効回答数は中学一年299名、中学二年339名、中学三年324名の計962名。男子482名、女子480名である。(巻末「調査票見本」参照)

2 学校生活の楽しさ

まず、表1に目を通して欲しい。これは、学校生活の領域別の楽しさを7段階評価で求めたもので、生徒たちにすれば、学校生活の中で、もっとも楽しいのは、「友だちとの雑談」で、「まあ楽しい」の14.9%を含めると、ほぼ9割の生徒たちが「楽しみ」と答えている。次いで、「遠足や修学旅行」、第三位以下に「クラブ活動」や「休み時間」が続いている。そして、「英語の授業」は、提示した10項目中の6位で、7位の「数学の授業」とともに、「まあ楽しい」を含めて、楽しみ派5割、中間派3割弱、苦痛派(楽しくない)2割5分強の分布を示していた。

これらの結果は、すでに引用した小学生に対する学校観調査と同じように、生徒たちが、「友だちとの雑談」や「遠足や修学旅行」そして「クラブ活動」、「休み時間」などのいわば仲間同士のふれあいに、生きがいを見いだしていることを暗示している。もちろん、われわれおとなたちも、かつて、しぶしぶ、勉強した思い出を持っている。したがって、期末テストが苦痛だという生徒たちの気持ちも理解できる。しかし、英語や数学の時間が「かなり」、「とても」楽しいと答えた者が2割程度にとどまっていたのは、考えさせられるデータであった。

表1の結果を、「とても楽しい」を1、「ぜんぜん楽しくない」を7として、平均値の形に換算すると、図1のように、学校の楽しさは、ほぼ3つの領域に分類できる。まず、「かなり楽しい」のは、「友だちとの雑談」や「遠足、修学旅行」で、次いで、「まあ楽しい」のが「クラブ活動」以下の3項目、そして、「先生との会話」以下の5項目は、楽

表1 学校の楽しさ

% (人)

	とても 楽しい	かなり 楽しい	まあ 楽しい	はんぶん はんぶん	まあ 楽しくない	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない
友だちとの雑談	50.4 (480)	25.3 (241)	14.9 (142)	6.7 (64)	1.2 (11)	0.6 (6)	0.8 (8)
遠足や修学旅行	45.2 (425)	22.3 (210)	19.4 (182)	8.6 (81)	1.8 (17)	1.1 (10)	1.6 (15)
クラブ活動	33.9 (320)	20.4 (193)	26.3 (248)	11.2 (106)	2.9 (27)	3.0 (28)	2.3 (22)
休み時間	28.2 (269)	21.0 (200)	30.7 (293)	13.3 (127)	3.5 (33)	2.0 (19)	1.3 (12)
運動会や文化祭	27.0 (237)	19.6 (172)	25.8 (227)	16.0 (141)	5.6 (49)	3.1 (27)	3.0 (26)
先生との会話	9.4 (89)	11.8 (112)	23.0 (218)	35.5 (336)	7.3 (69)	5.7 (59)	7.3 (69)
英語の授業	8.6 (82)	10.1 (97)	30.8 (295)	26.6 (255)	7.9 (76)	8.2 (79)	7.7 (74)
数学の授業	9.0 (85)	10.5 (99)	25.1 (236)	29.3 (276)	10.5 (99)	8.1 (76)	7.4 (70)
生徒会や学活	2.5 (24)	4.3 (41)	17.2 (163)	34.2 (324)	15.5 (147)	14.1 (134)	12.1 (115)
期末テスト	2.3 (22)	2.8 (26)	6.4 (60)	18.5 (175)	12.0 (113)	18.2 (172)	39.8 (376)

質問文 「以下に、学校生活のいろいろな場面が書いてあります。それぞれの楽しさはどれくらいですか。あなたの思った通りに○をつけてください」

図1 学校の楽しさ(平均値)

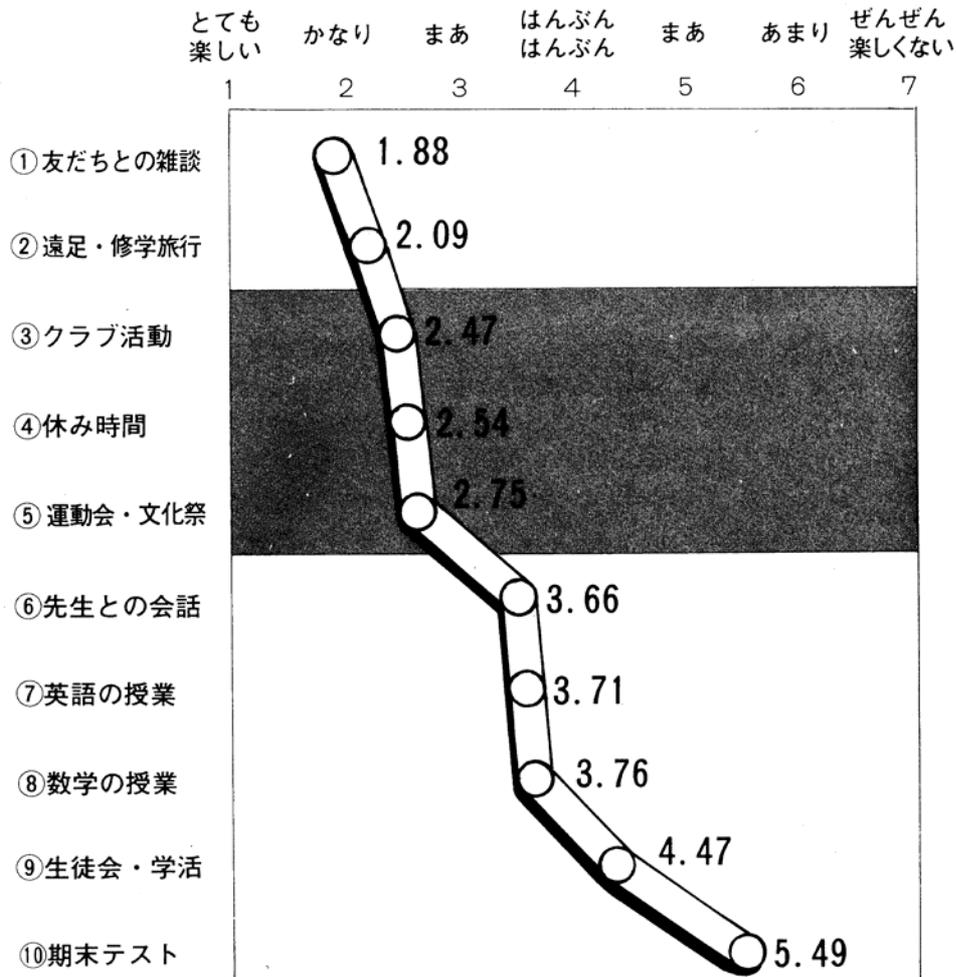


表2 学校の楽しさの学年別推移(平均値)

	中 1	中 2	中 3
① 友だちとの雑談	1.80	1.95	1.84
② 遠足や修学旅行	1.76	★2.21	★2.19
③ クラブ活動	2.10	★2.69	★2.59
④ 休み時間	2.23	★2.61	★2.68
⑤ 運動会・文化祭	2.21	★2.90	★2.92
⑥ 先生との会話	3.11	★4.10	★3.69
⑦ 英語の授業	3.27	★3.88	★3.92
⑧ 数学の授業	3.05	★4.17	★3.93
⑨ 生徒会や学活	4.10	★4.69	★4.59
⑩ 期末テスト	5.06	★5.66	★5.82

注1) 平均値の尺度は図1と同じ
 注2) 中1と中2・3との間に★印の項目については1%レベルで有意の差が得られた。

表3 「学校生活の楽しさ」の相関係数

	運動会 文化祭	友だち との雑談	休 み 時 間	ク ラ ブ 活 動	先 生 と の 会 話	英 語 の 授 業	生 徒 会 学 活	数 学 の 授 業	期 末 テ ス ト
遠足・修学旅行	★ 0.604	★ 0.509	★ 0.483	0.313	0.252	0.222	0.205	0.142	0.000
運動会・文化祭		★ 0.394	0.348	0.343	★ 0.363	0.260	★ 0.390	0.194	0.123
友だちとの雑談			★ 0.523	0.259	0.248	0.182	0.189	0.119	- 0.017
休みの時間				0.242	0.209	0.210	0.200	0.149	- 0.008
クラブ活動					0.308	0.193	0.245	0.197	0.058
先生との会話						0.327	★ 0.486	★ 0.405	0.333
英語の授業							0.270	★ 0.431	0.244
生徒会・学活								0.264	0.294
数学の授業									0.324

★ = $r > 0.350$

しさを見だしにくいという反応である。

図1の平均値を、学年別に集計し直した結果を、表2に示した。表中の★印は中一、中二、中三との間に有意の差が生じた項目だが、その結果によれば、学年によって、楽しさが変わらないのは、10項目中「友だちとの雑談」の1項目のみで、その他の項目は、いずれも、0.5から1.0程度、楽しさが低下している。中でも、「先生との会話」や「英語の授業」、「数学の授業」など、学習面に関係した項目の低下が著しい。

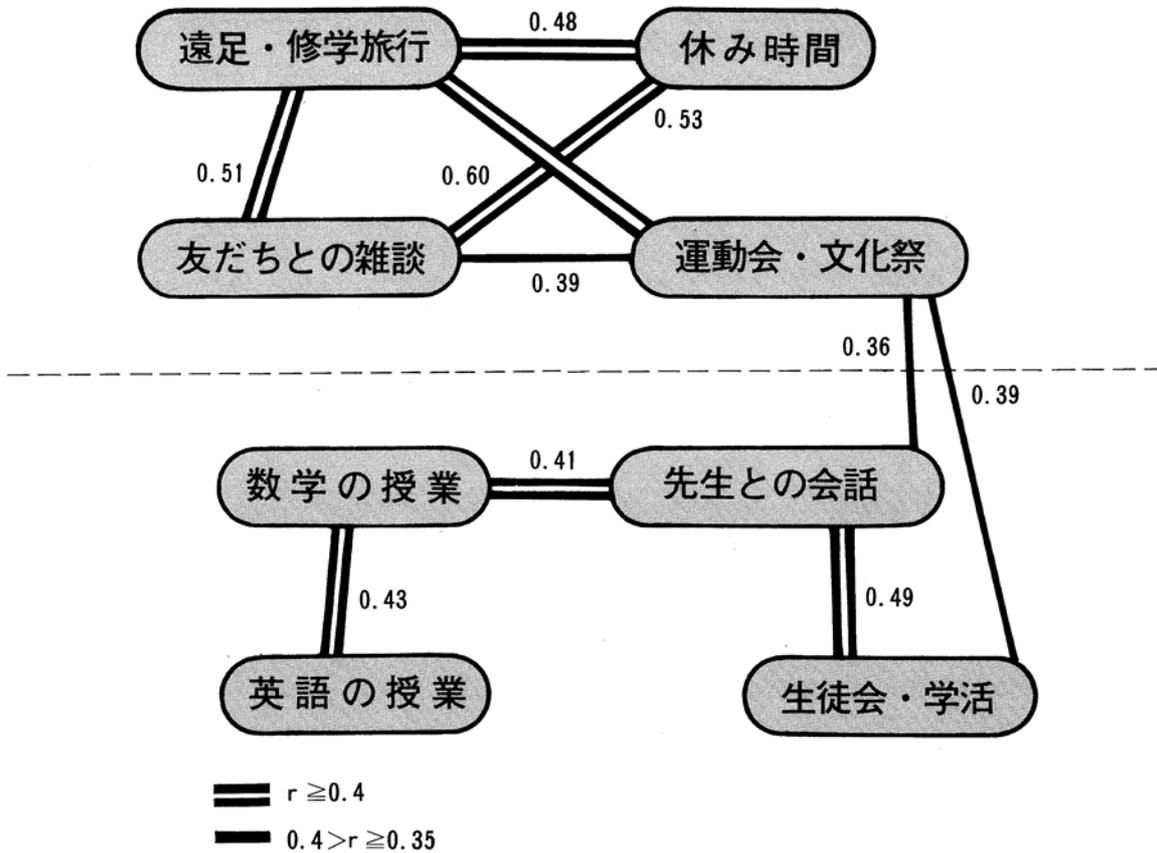
そこで、各項目間の関連をみるために、相関係数を取り、マトリックスを作成したのが、表3である。なお、便宜上係数値が0.35以上の項目間に★印を付してある。これは、★印の項目間で、相関が高いことを意味している。

しかし、表3では全体の構造が分かりにくいと思われるので、表中から0.35以上の項目を抜きとって、図化したのが、図2である。ここでは、相関係数0.4以上の相関の特に強い項目間を二本の線で結んだ。

図から明らかなように、学校の楽しさは、左上の「友だちとの雑談」「休み時間」のような informal なふれあいの領域と、「英語の授業」や「数学の授業」、「先生との会話」などの学問的な領域とに、二分されている。もちろん、表3によれば、授業の時間と友だちとの雑談との相関係数は、0.1~0.2程度の無相関を示しているから、図2中の上と下の項目群のあいだは、相反する関係——例えば友だちとの雑談が楽しみの者は英語の授業が大嫌いというような——が認められるとはいえない。しかし、少なくとも友だちとのふれあいと授業の楽しさが共存していないのも、またたしかであろう。

そして、図中に示したように、ふれあいと授業との間を、「運動会や文化祭」、「生徒会や学活」とが、媒介の機能を果している。

図2 「学校の楽しさ」の相関略図



II章 学業の意味



1 学業成績に対する評価

学校生活の楽しさを分析しているうちに、人間的なふれあいに対するあこがれと、授業に対する苦痛感とがあらわになってきた。

そこで、ふれあいの分析は、のちにゆずるとして、生徒たちの授業に対する考え方を、もう少し掘り下げることにした。

表4は、学業成績についての自己評価を示した。学業成績が、「ほぼまん中」と答えた生徒が4割弱、そして、「40人のクラスで10番位」あるいは「うしろから10番位」が、それぞれ2割と、生徒たちは、学業成績について、かなり客観的な見方をしていた。

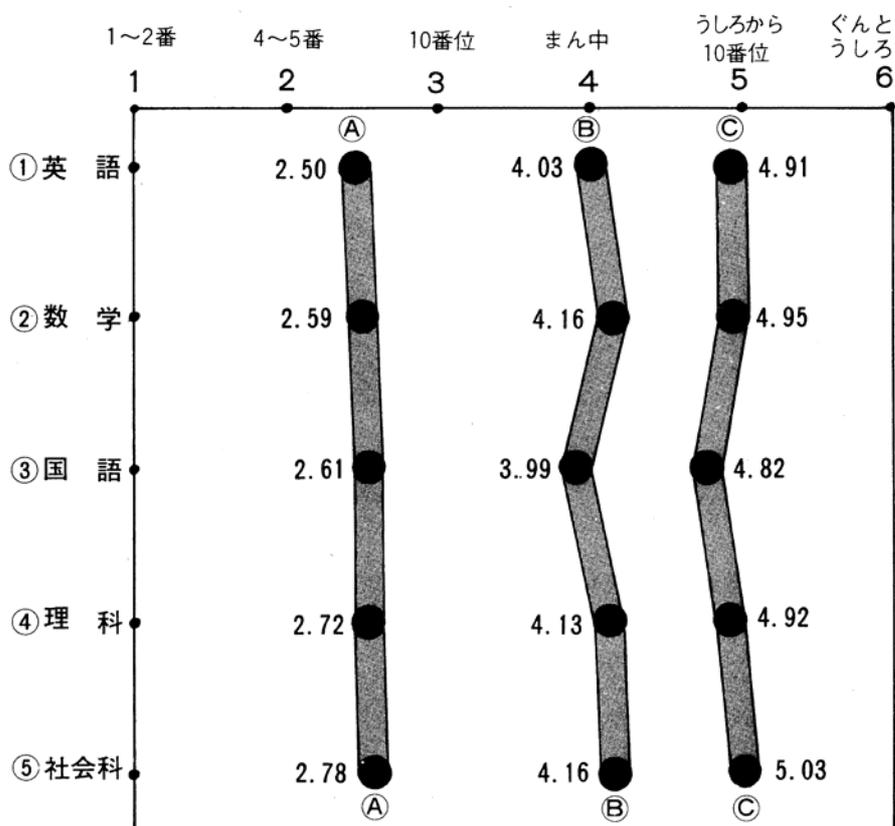
しかし、このデータだけでは、さしたる意味を持ちえないから、図3に目を通して欲しい。

表4 学業成績についての自己評価
(40人のクラスで)

	1～2番	4～5番	10番位	まん中	うしろから 10番位	ぐんとう うしろの方
英語	3.4 (32)	7.9 (75)	18.9 (178)	36.5 (345)	18.2 (172)	15.0 (142)
数学	2.7 (25)	6.8 (64)	16.3 (154)	37.2 (350)	20.3 (191)	16.8 (158)
国語	2.2 (21)	7.5 (71)	16.4 (155)	47.7 (451)	15.6 (148)	10.6 (100)
理科	1.9 (18)	6.6 (62)	15.5 (145)	41.6 (389)	21.3 (199)	13.0 (122)
社会科	3.0 (28)	6.9 (65)	14.4 (135)	38.2 (359)	22.2 (209)	15.3 (144)
音楽	7.0 (66)	5.3 (50)	11.8 (111)	39.7 (372)	20.5 (192)	15.7 (147)
美術	1.7 (16)	8.9 (82)	13.2 (121)	46.2 (425)	18.9 (174)	11.1 (102)
技術・家庭科	1.8 (16)	4.3 (38)	11.5 (101)	48.0 (420)	20.9 (183)	13.4 (117)
保健体育	2.6 (23)	5.1 (45)	11.5 (102)	47.5 (422)	19.9 (177)	13.4 (119)

図3 学業成績の上限・下限

(40人のクラスで)



- ① A = 「あなた自身の気持ちとしては、勉強の成績がどの位になればよいと思っていますか」
 ② B = 「あなた自身の成績はクラスの中でだいたいどの位だと思いますか」
 ③ C = 「かりに宿題以外に家庭での勉強をぜんぜんしなかったとしたらあなたの成績は、どの位になると思いますか」

表5 英語と数学を例にした成績の上限と下限 (%)

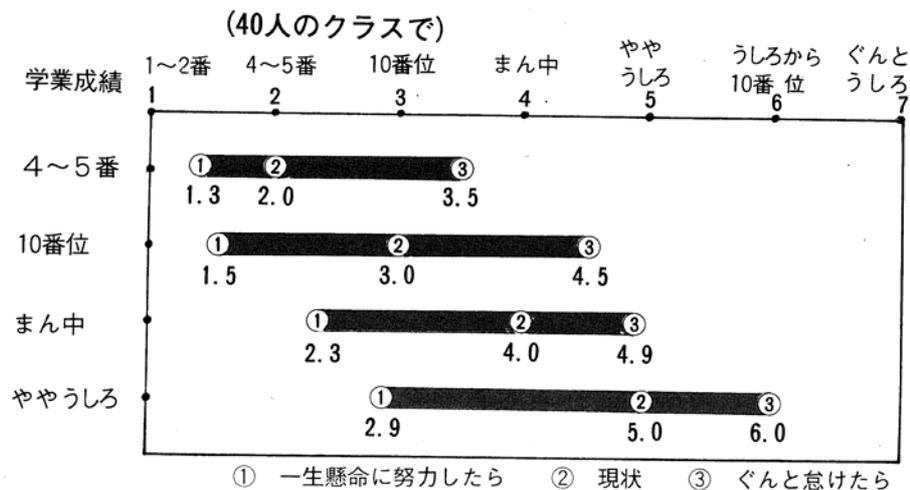
		トップ	5番位	10番位	まん中	30番位	ラスト
英語	現状	3.4	7.9	18.9	36.5	18.2	15.0
		30.2				33.2	
	努力目標	27.1	22.9	27.1	20.0	1.4	1.6
		77.1				3.0	
	怠けたら	1.8	1.7	6.2	23.3	27.6	39.6
		9.7				67.2	
数学	現状	2.7	6.8	16.3	37.2	20.3	16.8
		25.8				37.1	
	努力目標	23.1	23.2	29.7	20.8	1.9	1.3
		76.0				3.2	
	怠けたら	1.6	2.6	5.6	21.3	27.0	42.0
		9.8				69.0	

この図は、「あなたの気持ちとしては勉強の成績が、どのくらいになれば良いと思いますか」(A)という形で、「成績期待」を尋ね、「かりに、宿題以外に家庭での勉強をぜんぜんしなかったとしたら、あなたの成績は、どのくらいになると思いますか」(C)の設問を用いて、怠けたさい、成績の下がる下限を予想させ、成績の現状(B)との開きを、平均値の形で示したものである。

生徒たちの中には、成績に自信を持つ子も、自信を失いがちな子もいよう。そうした子どもたちの成績の平均値(B)は当然、「まん中」程度の4.0に近づこう。したがって、現実の成績(B)の4.0と、達成目標(A)との開きが問題になるが、英語を例にするなら、(A)の平均値が2.50、つまり、せめて、7~8番の成績をとりたいが、生徒全体の希望であった。

これを、もう少し、こまかく検討すると表5のように、英語や数学の場合、75%以上の生徒が、10番以内の成績を望んでいた。ぜひとも、トップ層と考える生徒も、2割を越える。しかし、怠けたら、どの程度まで成績が落ちるかと問われると、4割の生徒がクラスのラスト程度まで下向することを予測していた。

図4 成績階層別の上限・下限



つまり、現実の成績(㊸)は、仮の姿であって、努力すれば、ぐんと上るし、怠れば、ぐんと下がるというのが、成績についての子どもたちの見方である。

こうした学業成績の上限と下限とを、成績階層別に分析したのが、図4である。先ほど、ほぼ4割の生徒たちが、怠れば、ラストの方まで、成績が下向することを予想していると述べた。そして、図が示すように、トップ層の子でも、怠れば、まん中ぐらいに、また、上の下層の生徒も、予習や復習をしなければ、かなりうしろの方まで、成績が下がると考えていた。

2 家庭学習の形態

今まで述べてきたように、生徒たちは、学業成績は努力に比例すると考えていた。そうであるとするなら、生徒たちは、成績を良くするために、家庭学習に励まねばならない。

まず、通常の家家庭学習のパターンを表6に示した。表では、見やすさを配慮して、英語、国語、理科の勉強方法を掲げるにとどめたが、①英語は、たえず勉強をする予習、復習型なのに対し、国語や理科は、テスト前だけ勉強する者が多い。②中学一年生に、予習・復習型が多いが、中学二年から、テスト前型が増加するなどの傾向がみられる。

なお、学習塾通いは、表7のように、中学一年生で44.2%、二年生で46.5%、三年生で50.8%の高率であった。ただし、どの学年とも、3割以上、「前は通っていたが、今はよした」と答えた生徒が存在したのは、注目をひく結果であった。それと同時に、表8の「学

表6 家庭学習の進め方

(%)

		全 体	中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
英 語	予 習	35.8	33.1	38.8	35.2	33.3	38.8
	復 習	36.7	50.4	34.6	28.0	34.6	39.6
	テスト前	27.5	16.5	26.6	36.8	32.0	21.6
国 語	予 習	16.9	25.5	14.4	12.4	17.0	17.1
	復 習	35.8	45.9	31.0	32.4	34.6	37.3
	テスト前	47.4	28.6	54.6	55.2	48.5	45.6
理 科	予 習	9.6	14.6	10.9	4.2	12.4	6.6
	復 習	36.7	53.5	35.1	24.5	36.5	36.9
	テスト前	53.7	31.9	54.0	71.2	51.1	56.5

表7 学習塾通いの実態

(%)

		全 体	中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
現在 通っている	週3回以上	21.8	22.5	20.1	23.3	25.7	18.4
	週1~2回	25.4	21.7	26.4	27.5	25.9	25.4
前は通ったが、今はよした 以前も、今も通っていない		31.8	30.2	32.1	32.4	32.6	30.5
		21.1	25.6	21.4	16.8	15.9	25.7

習塾への評価」によれば、どの項目とも、4割近い生徒たちが、肯定とも、否定ともいえない反応を示していた。さらに、図5に示したように、学習塾に対するイメージは、きゅうくつさに象徴され、「非常にきゅうくつ」の18.3%、「かなりきゅうくつ」の33.6%など、平均値（非常に明るいを1.0として）は、3.59で、通信教育に対するイメージより、一般的に暗いものであった。

図5 学習塾と通信教育のイメージ(平均値)

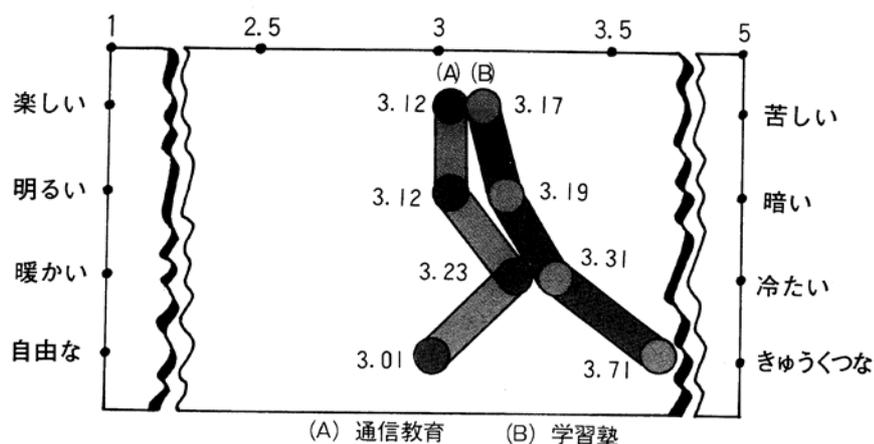


表8 学習塾への評価

%(人)

	非常に	かなり	中間	かなり	非常に	
友だちがつかれる	16.7 (154)	30.7 (283)	37.4 (345)	9.0 (83)	6.3 (58)	友だちをつくれぬ
教える内容が多い	13.5 (124)	28.3 (260)	47.6 (437)	6.4 (59)	4.1 (38)	内容が少ない
授業が分かりやすい	8.7 (80)	31.0 (286)	41.5 (383)	12.0 (111)	6.7 (62)	授業が分かりにくい
学力がつく	8.6 (79)	27.9 (257)	45.9 (422)	9.6 (88)	8.0 (74)	学力はつかぬ
先生に親しみやすい	14.2 (131)	22.9 (211)	39.4 (363)	13.5 (124)	10.0 (92)	先生に親しみにくい
授業はおもしろい	9.3 (86)	21.7 (200)	42.2 (389)	16.3 (150)	10.5 (97)	授業はつまらない

表9 通信教育の実態

(%)

	全体	中1	中2	中3	男子	女子
以前も今も利用していない	71.4	77.3	70.1	68.0	73.9	69.5
以前利用し、今やめた	13.4	10.9	11.9	16.8	11.3	15.4
現在、利用している	15.1	11.7	18.0	15.2	14.8	15.1

これらの3つの傾向を考慮すると、生徒たちは通塾すれば成績が上がるというより、仕方なしに、塾通いをしている印象が強い。

なお、先ほどの図5によれば、通信教育が学習塾より明るいイメージを抱かれていたので、通信教育の利用率を尋ねたところ、平均して、15%の生徒たちが、通信教育を利用した学習を行っていた(表9)。また、表10に、通信教育を行っている商品名を示し、その知名度を調べたが、上位3社の知名度は5割を上回っていた。こうした結果から考えると今後、通信教育を利用した家庭学習が、現在以上に定着する可能性が強い。

今まで、家庭学習、学習塾、通信教育の順に、勉強の進め方の実態を考察してきた。塾通いする者5割、通信教育を利用する者15%などで、生徒たちは、それぞれの仕方で、家庭学習を進めていた。こうした結果をまとめる意味もあって「成績を良くするには、どんな勉強方法をとったらよいか」を尋ねてみた。

表11の結果が示すように、教科によって、理想的な学習形態に違いが認められるが、①学習方法の中で、もっともオーソドックスと思われる「参考書などを使って、自分で力をつける」ことへの賛成者は、英語で30%、国語46%にとどまっていた。②通信教育の効果を認める者は、予想外に多く、10~15%、学習塾に望みを託す者は、14~24%であった。③各教科共通して、三年生になると、家庭教師の力に頼ろうとする者が増加するなどの結果が得られた。特に、③の傾向は、三年生ともなると、学習がむずかしくなり、参考書や塾通いなどでは、学力の向上を望めなくなることが、最後の頼みとして、家庭教師への依存を強めたものと考えられる。

表10 通信教育の知名度

(%)

		全体	中1	中2	中3	男子	女子
A	社	65.7	58.8	64.9	72.8	61.8	70.9
B	社	56.3	41.0	61.3	64.6	51.6	63.1
C	社	55.7	46.0	59.5	60.0	51.9	60.0
D	社	27.6	25.3	30.9	25.7	26.1	27.6
E	社	27.0	29.7	26.5	23.8	27.3	26.3
F	社	24.3	23.4	24.9	23.0	25.2	20.7
G	社	6.1	8.7	4.3	5.1	6.2	5.5
その他		10.4	15.5	9.9	6.8	9.4	11.2

表11 成績を良くするには、どんな勉強方法をとったらよいか

(%)

		全体	中1	中2	中3	男子	女子
英語	参考書	30.4	34.6	33.0	23.9	30.9	29.9
	家庭教師	30.4	21.3	27.6	41.2	28.0	33.3
	学習塾	24.2	28.7	22.9	21.9	26.5	21.9
	通信教育	14.9	15.4	16.5	13.1	14.8	14.8
国語	参考書	46.0	49.6	44.6	43.6	39.1	53.5
	家庭教師	23.4	14.6	23.4	31.1	24.3	22.6
	学習塾	20.4	25.2	19.6	17.4	25.7	14.6
	通信教育	10.2	10.6	12.3	7.9	10.9	9.2
理科	参考書	52.0	55.5	52.5	48.7	52.1	52.0
	家庭教師	23.3	15.7	20.6	32.4	20.2	27.0
	学習塾	14.0	15.4	14.6	12.4	16.5	11.2
	通信教育	10.7	13.4	12.3	6.5	11.3	9.7

3 授業の楽しさ

生徒たちは、学業成績は努力を反映すると考えていた。したがって、Ⅱ-2でふれたようなさまざまな方法を利用して、学習を続ける。しかし、表4の「学業成績についての自己評価」の項でもふれたように、どの教科にせよ、学業成績に自信を持てるのは、10%前後の生徒に限られ、ほぼ4割の子は、クラスのまん中程度、3割強の子は、まん中よりうしろの学力と、自己を評価していた。

こうした学力の開きは、授業に臨む態度と、どのような関係を持つのであろうか。表12は、「英語の授業の楽しさ」を規定する要因を、数量化Ⅱ類を利用して、分析した結果を示している。ここでは、英語の成績、学年、など、表中に示した12のアイテム（項目）を変数として分析を試み、説明力の大きなアイテムから順に、第13位までの偏相関係数を掲げている。

数量化Ⅱ類では、アイテムの説明力は、偏相関係数の大きさに反映されるので、係数に注目すると、「英語の授業の楽しさ」をもっとも規定しているのが、「英語の成績」で、次いで、「学年」、「将来つきたい職業」の順位であった。国語や社会科の成績、塾通いの有無、性別などのアイテムは、英語の授業を受ける時の楽しさに関連しないというのである。

表12によれば、英語の授業の楽しさは、なによりも、英語の成績に規定されるという。当然のことながら、成績の良い子たちは、楽しく授業に臨み、不振がちな子は、小さくなって、授業を聞いているのではないかと考えられる。先ほどのアイテムの分析では、このようなカテゴリー（反応のパターン）間の強弱が分からないので、カテゴリーも含めて、アイテムの重みを考えるために、表13を作成した。

注1に記したように、「英語の授業の楽しさ」を分析するのに利用したアイテムは13、それぞれ、2（性）から6（将来の職業）のカテゴリーで構成されているから、全体で、61アイテム・カテゴリーが、授業の楽しさを説明するための総数となる。

この61アイテム・カテゴリーの中から、中間の49アイテム・カテゴリーを省略して、もっとも説明力の大きなアイテム・カテゴリーを6項目ずつ示したのが、表13である。この場合、説明力とは、英語の授業を楽しくする要因（促進する要因）と、授業の楽しさを衰退させる要因（阻害する要因）とが考えられるが、前者・後者とも、第二位までを、英語の成績が占め、この2アイテム・カテゴリーのカテゴリー・スコアは、第3位以下より、大きな数値を示している。

表12 「英語の授業の楽しさ」の偏相関係数

(数量化Ⅱ類)

順位	アイテム	係数	順位	アイテム	係数
1	英語の成績	0.311	8	美術の成績	0.049
2	学年	0.136	9	音楽の成績	0.047
3	将来の職業	0.112	10	体育の成績	0.044
4	数学の成績	0.092	11	国語の成績	0.034
5	技術・家庭科の成績	0.064	12	理科の成績	0.032
6	社会科の成績	0.063	13	性	0.013
7	学習塾通いの有無	0.049			

Ⅲ章 意欲の構造



1 クラブ活動の楽しさ

生徒たちは、学業成績が努力を反映すると信じて、勉学に打ち込む。しかし、多くの生徒たちは、学力を思うように上げることができず、授業に対して、楽しみを味わえなくなる。それと同時に、努力の不足を感じていく。逆に、成績の良い生徒たちは、努力が報いられたという感じを持ちながら、授業に楽しみを見いだす毎日を送る。

その結果、前者はますます勉強に嫌気を感じ、後者は、勉学に意欲を燃やす。前者は悪化の、そして、後者は良い方向への再生産を重ねて、両者の差は、なお一層、開いていく。

もちろん、学校生活は、授業のみで支えられているものではない。したがって、仮に、授業の時間に楽しみを感じられなくとも、その他の時間に充実感を味わえばよいという見方もなりたつだろう。

すでにふれた表1によれば、生徒たちは、クラブ活動や友だちとの雑談に楽しみを見いだしていた。授業時間の楽しさが、学力優秀の属性に支えられるとして、それでは、クラブ活動や雑談に生きがいを感じているのは、どのような属性の生徒たちなのであろうか。

先ほどの分析と同じように、数量化Ⅱ類を使って、多変量解析を試みてみよう。表14に、「クラブ活動の楽しさ」を規定する要因の偏相関係数を示した。表12の「英語の授業」では、学業成績が最大の説明要因であった。それに対し、表14によると、「クラブ活動の楽しさ」は、まず「学年」、次いで「体育の成績」、第三位に「クラブ活動の有無」で規定されている。そこで、上位3つのアイテムを選んで、表13と同じようなカテゴリー・スコアを図化すると、図6の通りとなる。

中央の直線より、左側が、クラブ活動の楽しさを促進する要因、そして、右側が、阻害する要因である。なお、数量化Ⅱ類は、

$$y = a_1x_1 + a_2x_2 + a_3x_3 + \dots + a_nx_n + e$$

ただし $x_1 \dots x_n$ は変量
 $a_1 \dots a_n$ は係数
 e は誤差

の形で、理論的に構成されているので、各アイテム・カテゴリーを加算することができる。そこで、クラブ活動の楽しさを促進する要因を挙げると「一年生(学年)で、体育の得意な(体育の成績)、スポーツ・クラブへ入っている(クラブ活動)生徒」であり、逆に、クラブ活動に楽しさを感じていないのは、「三年生(学年)で、体育の苦手(体育の成績)なクラブへ入っていない、あるいは退部した(クラブ活動)生徒」である。中でも、中学一年生と比べ、中学二～三年生が、クラブ活動に楽しさを感じていないのが注目をひく。

つまり、確かに、クラブに楽しさを見いだしている生徒は多いが、それは、一年生のスポーツ好きの生徒に限られているのである。

それでは、「友だちとの雑談が楽しい」というのは、どんな生徒なのか、今までと同じ分析方法で、検討を進めよう。

表15に、偏相関係数を示したが、説明力の大きな要因は、第一位「性別」、第二位「社会科の成績」、第三位「クラブ活動」、第四位「保健体育の成績」の通りであった。中でも、性別の係数が大きい。そこで、アイテムの中で、カテゴリーの持つ方向性を知るために、第三位までの要因に限って、カテゴリー・スコアを図化したのが、図7である。

「友だちとの雑談が楽しみ」を促進するのは、「女性」以下「社会科の成績が普通程度」、「スポーツ・クラブに所属」であり、逆に、友だちとの雑談に楽しみを見いだせないのは、「男性」、「社会科の成績が良く」、「クラブに入っていない」などの属性であった。

表14 「クラブ活動の楽しさ」の偏相関係数
(数量化Ⅱ類による)

順位	ア イ テ ム	係 数	順位	ア イ テ ム	係 数
1	学 年	0.1403	8	国語の成績	0.0642
2	体育の成績	0.1264	9	英語の成績	0.0600
3	クラブ参加の有無	0.1234	10	音楽の成績	0.0518
4	技術・家庭科の成績	0.1186	11	学習塾通いの有無	0.0514
5	社会科の成績	0.0982	12	美術の成績	0.0422
6	将来の職業	0.0721	13	理科の成績	0.0367
7	数学の成績	0.0698	14	性	0.0122

表15 「友だちとの雑談が楽しみ」の偏相関係数

順位	アイテム	係数	順位	アイテム	係数
1	性別	0.189	8	音楽の成績	0.060
2	社会科の成績	0.127	9	理科の成績	0.050
3	クラブ活動	0.103	10	通塾の有無	0.049
4	保健体育の成績	0.098	11	英語の成績	0.049
5	技術・家庭科の成績	0.089	12	数学の成績	0.049
6	将来の職業	0.066	13	学年	0.046
7	国語の成績	0.063	14	美術の成績	0.016

図6 「クラブ活動の楽しさ」のカテゴリー・スコア

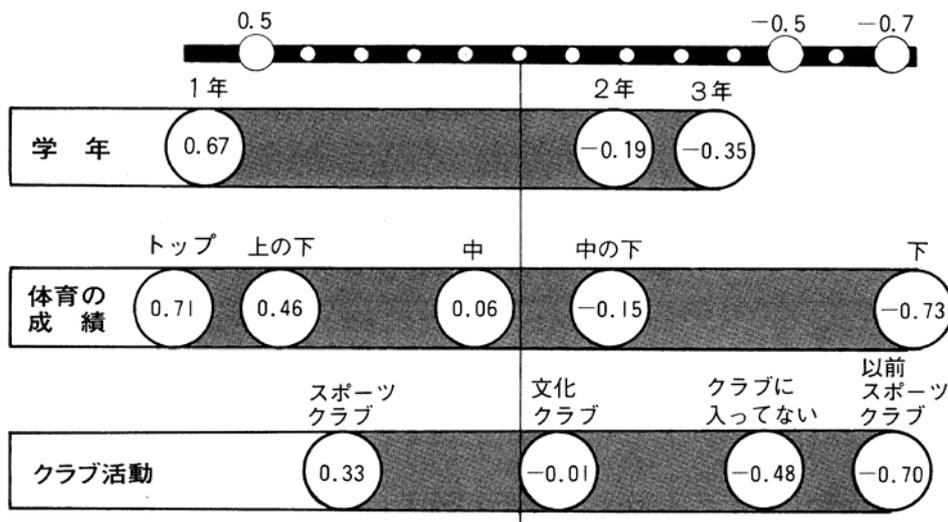
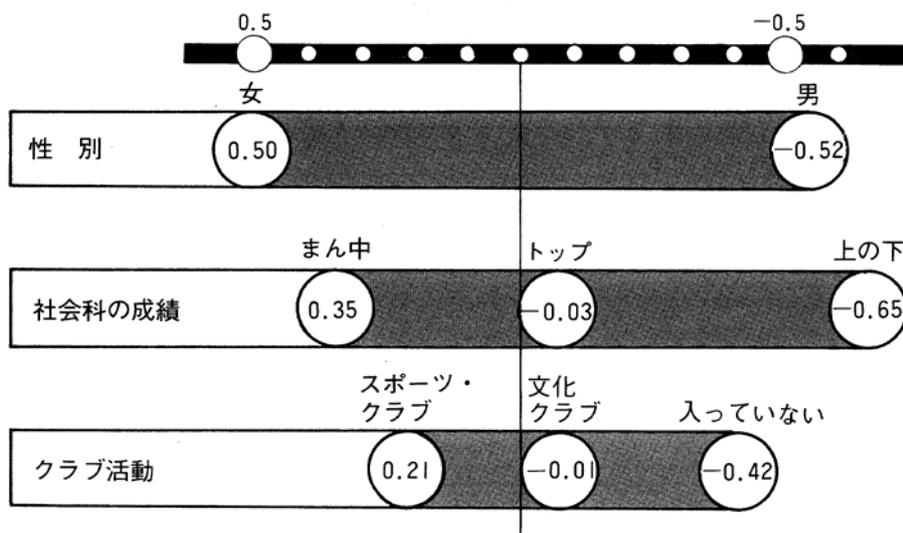


図7 「友だちとの雑談が楽しみ」のカテゴリー・スコア



2 「ゆっくり寝てみたい」の背景

今までの考察を要約すれば

- 授業に楽しさを感じられる条件—成績の良さ
- クラブ活動に楽しさを感じられる条件—スポーツの得意なクラブへ入っている一年生
- 友だちとの雑談に楽しさを感じられる条件—成績が真ん中で、主として、クラブに入っている女子

の通りであった。これらの属性が、相互にどのような関係を保って学校生活を支えているのかの分析は、のちにゆずるとして、もう少し、別の角度からのデータを提出しておこう。

表16は、注記したように、「1日が25時間となり、もう少し、時間の余裕が生まれたら、あなたは、その時間を何に使いたいですか」の形で、生徒たちに、余暇の使い方を尋ねたものだが、7割を超える生徒が、「スポーツをやりたい」、「友だちとつきあいたい」、「ゆっくり寝てみたい」と答えている。

こうした結果は、先にふれた学校生活の楽しさの順位と類似している。冒頭でふれた表1によれば、学校生活の第一位に「友だちとの雑談」、次いで、「遠足や修学旅行」、そして、「クラブ活動」などの項目が、楽しい時間として挙げられたのは、すでに引用した通りである。つまり、学校生活であるとないとを問わず、生徒たちの「友だちとつきあいたい」、「スポーツをしてみたい」という気持ちは強いらしい。

表16 何に時間を使いたいか

項目	ぜひやりたい	まあやりたい	なんともいえない	あまりやりたくない	ぜんぜんやりたくない	平均値
① スポーツをやりたい	41.8	34.8	15.3	4.4	3.7	1.94
② 友だちのつきあい	35.0	41.5	18.6	2.8	2.1	1.96
③ ゆっくり寝てみたい	38.9	33.0	18.1	6.5	3.5	2.03
④ 小説・レコード	37.8	28.6	22.4	7.4	3.8	2.11
⑤ 趣味を深める	35.4	33.0	19.9	7.3	4.4	2.12
⑥ テレビ	11.5	27.8	38.5	14.9	7.3	2.79
⑦ 予習や復習	11.4	31.4	32.0	14.8	10.4	2.82
⑧ のんびり、ポケット	17.8	18.6	22.9	22.9	17.8	3.04
⑨ 深夜のラジオ	13.9	20.3	19.4	20.5	25.9	3.24
⑩ 学習塾へ行く	4.1	18.5	37.5	20.3	19.6	3.33

質問文 「1日が25時間となり、もう少し時間の余裕が生まれたらあなたは、その時間を何に使いたいですか」

ただし、表1の学校生活では質問項目になかった「ゆっくり寝てみたい」が、表16の中で、高い割合を占めているのが注目をひく。そこで、「ゆっくり寝てみたい」の背景をさぐらうために、相関係数を示すと、表17の通りになる。これを、要約したのが、図8だが、生徒たちの反応は、「ゆっくり寝たい=のんびりしたい」(A)と「予習や復習をしたい=学習塾へ行きたい」(B)、「スポーツをしたい=友だちとつきあいたい」(C)とに、三分されていた。この内、AとB、AとCとは逆相関の関係がみとめられるから、勉強をしたい(B)、あるいは、スポーツをしたい(C)と考えている子は、「のんびり」にあこがれることが少ないと考えられる。つまり、勉強にせよ、スポーツにせよ、意欲に燃える生

徒は、のんびりと無縁の生活を送っている。

今までの考察を通じて、スポーツ（クラブ）に意欲を示す子や、友だちづきあいに關心を持つ生徒—図8のC—の概略は図6、図7などでその一端をつかむことができた。しかし、「のんびりと寝てみたい」—図8のA—や「勉強をしたい」—図8のB—生徒の属性は明らかでない。もっとも、Bの勉強派は、当然、学業成績が良く、将来の達成に意欲を燃やす生徒層と考えられるが、Cののんびり派が、どういう属性の持主で、そうしたタイプの生徒が、生徒全体の中で、どの程度の割合を占めているのかが注目をひく。

表17 「時間の使い方」の相関係数

	のんびり ポケット	テレビ を見る	趣味を 深める	ラジオ を聞く	友だちとの つきあい	学習塾 へ行く	小説を 読む	スポーツを する	予習や復習 をする
ゆっくり寝る	★ 0.408	0.243	0.195	0.182	0.169	0.100	0.062	☆-0.022	☆-0.031
のんびりと		0.244	0.185	0.294	0.093	0.095	0.178	☆-0.074	☆-0.075
テレビを見る			0.092	0.215	0.187	0.152	0.014	0.196	☆-0.049
趣味を深める				0.203	0.273	0.090	0.285	0.073	0.073
ラジオを聞く					0.131	0.112	0.229	0.063	☆-0.056
友だちとのつきあい						0.227	0.224	★ 0.347	0.184
学習塾へ行く							0.234	0.175	★ 0.400
小説を読む								0.159	0.213
スポーツをする									0.163

★=r≥0.3 ☆=r=マイナス

図8 「時間の使い方」の相関略図

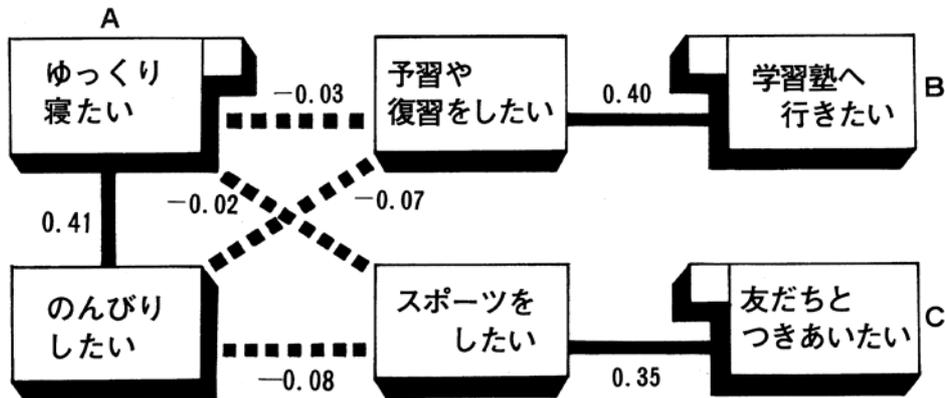


表18 「何に時間を使いたい」の学年別推移 (平均値)

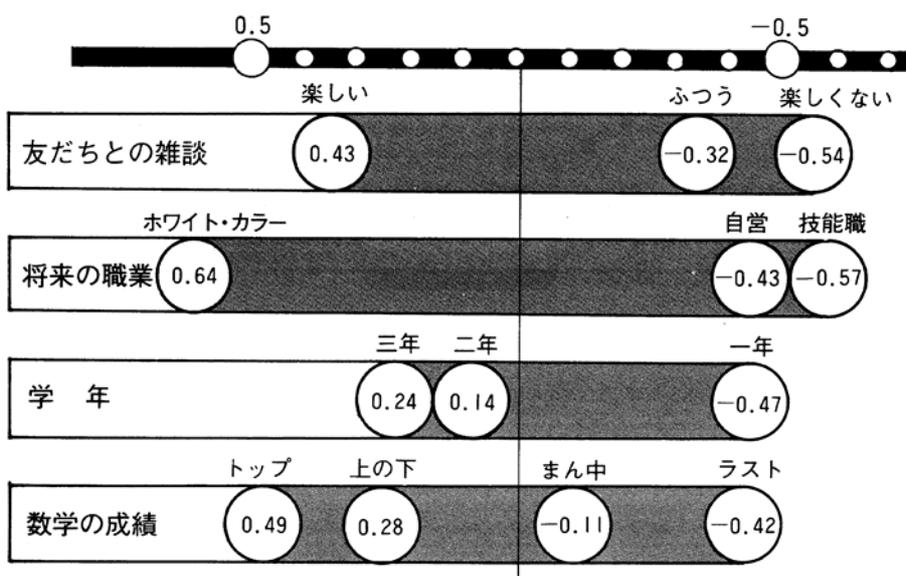
項 目	中 1	中 2	中 3
① スポーツをやってみたい	1.66	★2.03	★2.07
② 友だちのつきあいを深めたい	1.90	2.03	1.98
③ ゆっくり寝てみたい	2.19	1.98	1.89
④ 小説を読んだり、レコードを聞く	2.12	2.16	2.19
⑤ 趣味を深めるのに使いたい	2.18	2.09	2.15
⑥ もっとテレビを見たい	2.77	2.80	2.82
⑦ 予習や復習にその時間を使う	2.62	★3.03	★2.77
⑧ のんびりボケッとしていたい	★3.49	2.96	2.83
⑨ 深夜ラジオをゆっくり聞きたい	★3.53	3.17	3.17
⑩ 学習塾へ通って、成績を良くする	3.19	★3.49	★3.33

表16の「ぜひやりたい」を1 「ぜんぜんしたくない」=5とする
 ★= 学年によって、有意の差が生じた項目

表19 「ゆっくり寝たい」の偏相関係数

順位	ア イ テ ム	係 数	順位	ア イ テ ム	係 数
1	友だちとの雑談	0.117	8	数学へ成績	0.074
2	将来の職業	0.097	9	理科の成績	0.059
3	学 年	0.087	10	国語の成績	0.055
4	保健体育の成績	0.085	11	休み時間	0.054
5	社会科の成績	0.083	12	遠足や修学旅行	0.049
6	塾通いの有無	0.075	13	英語の成績	0.034
7	クラブ活動	0.074	14	性	0.000

図9 「ゆっくり寝たい」の 카테고리・スコア



そこで、表18に目をとめてほしい。これは、それぞれの欲求の学年別推移を、平均値の形で算出したものだが、★印は、学年によって、有意の差が生じたことを示している。この結果によると、中学一年と、中学二・三年との間に、大きな差が認められる。すなわち、一年生たちは、勉強（⑦や⑩）やスポーツ（①）に意欲を示し、のんびり（⑧や⑨）に反発する態度を示しているが、中学二年になると、スポーツや勉強への意欲が減退し、のんびりを受け入れる構えが生じてくる。なお、中学一年と中学二年との間に、大きな落差が存在するのに、中学二年と三年との間は、ほぼ平行する推移を示している。

こうした意味では、中学二年という学年は、中学生にとって、意味の変革する曲り角の年齢なのかもしれない。しかし、それらの考察は、まとめにゆずるとして、現在の文脈にとって重要なのは、中学一年はともかくとしても、中学二～三年生にとって、のんびり派が決して少数派と言えない事実であろう。

そこで、今までと同じように、数量化の方法を使って、のんびり派の属性を考察することにしたい。表19によれば、「ゆっくり寝たい」を規定する属性は、大きな方から順に、「友だちとの雑談」、「将来の職業」、「学年」の通りであった。しかし、これだけでは、各々のアイテムの持つ方向性が明らかでないので、今までの分析と同じように、カテゴリー・スコアに注目してみよう。図9に、その一例を示したが、「ゆっくり寝てみたい」と考えている生徒たちは、「数学の成績が良い二～三年生で、友だちとの雑談を楽しみに、将来の希望に燃えている生徒たち」であった。こうした属性は、従来の感覚から言えば、学校生活によく適応した、いわば優等生タイプの生徒である。それに対し、「ゆっくり寝なくとも良い」と答えたのは、「学業不振ぎみの技能職志望の友だちの少ない一年生たち」であった。

つまり、学業に精を出す生徒たちは疲れから、ゆっくり寝たいと考え、それに反し、学力競争から離脱しがちの生徒は、将来に希望を持っていない代わりに、睡眠は満ち足りているというのである。

Ⅳ章 生徒たちの未来像



1 学業成績によってグループ化

これまで、学校生活、そして、余暇の使い方などを中心として、生徒たちの意識の分析に努めてきた。「ゆっくり寝たい」や「友だちとの雑談」にせよ、そして、「クラブ活動」にせよ、学業成績への自覚が、生徒たちの意識の底流をなしているように感じられてならない。

そこで、今まで試みてきた数量化Ⅱ類とは別に、数量化Ⅲ類を利用して、生徒たちの意識をトータルとして分析することにした。なお、数量化Ⅱ類とⅢ類との相違にふれておくと、ある現象—例えば、クラブ活動が楽しみ—を説明するために、いくつかの変数を設定して、数値の大小によって、規定力の強さを考えるのが数量化Ⅱ類であった。つまり、数量化Ⅱ類とは、いくつかの独立変数を媒介として、従属変数を説明する分析法である。

それに対し、多くの変数を提示し、変数間の構造を調べるのが、数量化Ⅲ類となる。

しかし、理論的な説明は解説書にゆずり、具体例をあげてみよう。いくつかの変数間の関連を分析するのが、数量化Ⅲ類の手法なので、本調査では、以下の13を変数-変量が多すぎると説明力が落ちる一に定めた。

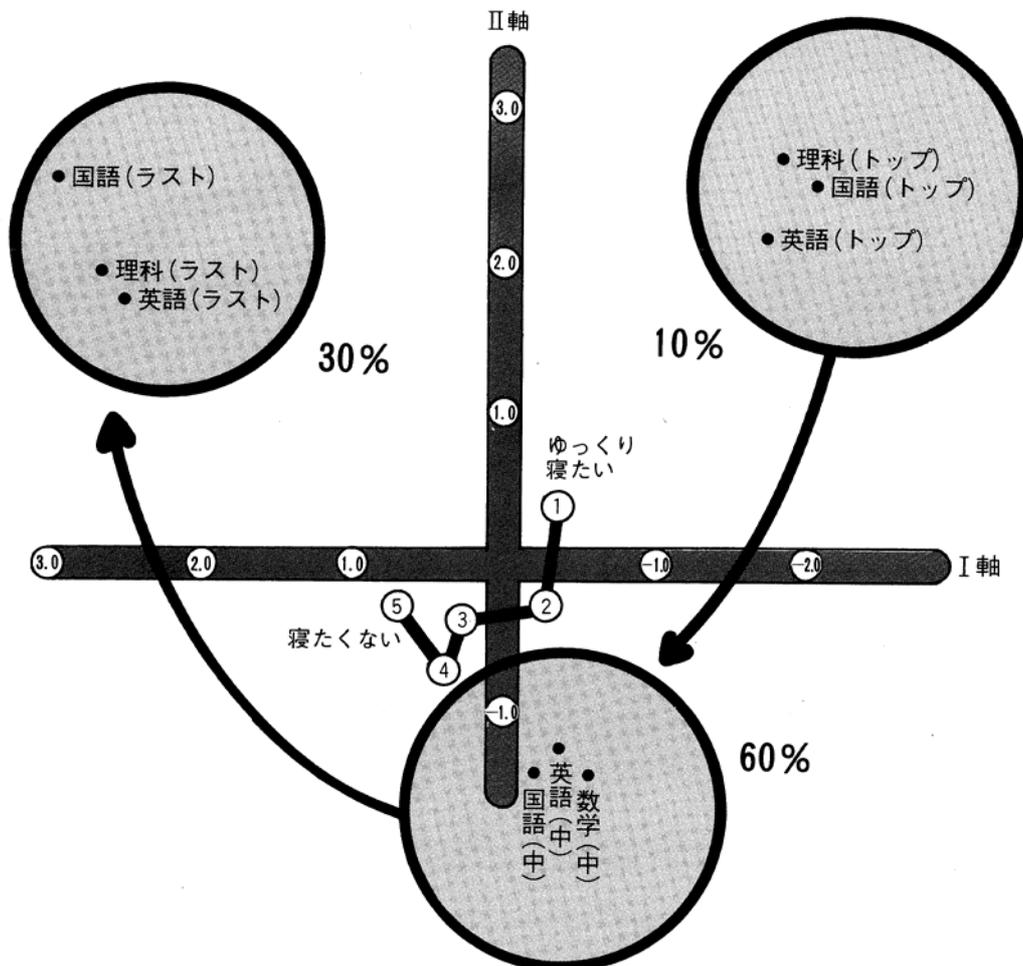
①国語、②社会、③理科、④英語、⑤数学の学業成績、⑥クラブ活動の楽しさ、⑦ゆっくり寝たいか、⑧友だちとつきあいたい、⑨深夜ラジオを聞きたいか、⑩通塾の有無、⑪学年、⑫性、⑬将来の職業

数量化Ⅱ類と同じように、①を例にするなら、成績がトップ、上、下、まん中、中の下ラストの5つ、⑫の性別は、男、女の2つ、そして⑪の学年は、一～三年の3つと、各アイテムはそれぞれ、2つから5つのカテゴリーから構成されている。それらの合計が59。つまり、13アイテム、59カテゴリーを利用して、中学生たちを、いくつかのグループに分けようとするのである。

そのさい、もっとも説明力の大きなアイテム・カテゴリーに着目して、グループ化するのが、数量化Ⅲ類の特徴である。

こうした背景をふまえて、図10に目を通してほしい。図中に○印でかこったように、生徒たちは、成績に対する自己評価によって、3つのグループに分類されたのである。まず、トップ層の成績をおさめる10%の生徒たち、次いで、教科の成績が「真ん中」程度の60%の大群、そして、成績が「中の下」以下の3割の生徒たちというグループである。

図10 生徒たちの分布



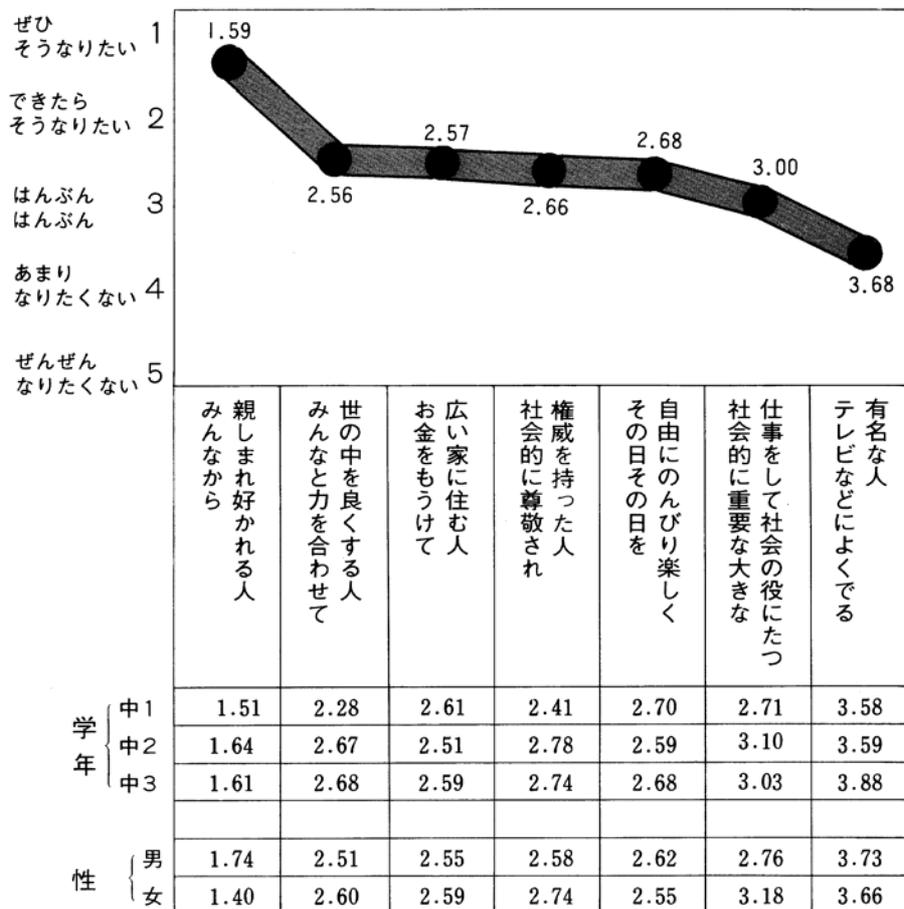
なお、参考までに、「ゆっくり寝たい」の反応を、図中に示してあるが、「とても寝たい」(①)が、中間グループへ接近しながらも、成績トップ層の方向へ位置し、逆に、「ゆっくり寝る気はない」(⑤)が、成績下位群へ傾斜している傾向がうかがわれる。これは、先ほどの図9で考察した「成績のトップ層の子は疲れ、学力不振ぎみの生徒は疲れていない」という結果を裏うちするものと考えられるが、この図で注目したいのは、「ゆっくり寝たいかどうか」では、生徒たちをグループ化できないという事実である。この他、クラブ活動、性別、学年…などの変量も、生徒をグループ化する指標になりえなかった。つまり、生徒たちの意識は、学業成績を基準として大別して、3つのグループに分かれていたのである。

2 社会的な権威は望まない

生徒たちの心の中に、学業が大きな影を投げかけているのは、上記の通りだが、その意味を考える前に、もう少し、補足のデータを提出しておきたい。

図11は、生徒たちに、将来の生き方を尋ねたものの平均値で、これによると、「みんなから親しまれ好かれる人」になりたいと考える生徒がきわめて多い。それと同時に、「社会

図11 将来の生き方



的に尊敬され、権威を持った人」、「社会的に大きな仕事をして、社会の役に立つ」などの生き方に、あまり生徒の支持が集まっていないのが注目をひく。しかも、グラフの下に注記したように、中学一年より二～三年になるにつれて、「権威」や「社会的に重要な仕事」に対する意欲が薄れ、「その日その日を自由にのんびり楽しく送りたい」という気持ちが強まって来る。

こうした将来の生き方の関連を、相関係数の形で示したのが、表20だが、「社会的に重要な大きな仕事をして、社会に役立つ」と、「社会的に尊敬され、権威を持つ人」と、「みんなと力を合わせて、世の中を良くする人」との3つの生き方の係数が高い。つまり、「生徒たちは、「力を合わせて」「社会に役立つ人」になれば、「尊敬され権威を持てる」と考えているらしい。

図12に、表20を要約した略図を示したが、「社会的に尊敬され、権威を持つ人」の生き方は、「社会に役立つ」ことを媒介として、「金持ちの人」になり「社会的に有名になること」も「人に好かれる人になること」も可能にすると、生徒たちは考えていた。

そこで、未来像の中で、すべてを可能にするキイ概念ともいうべき「尊敬され、権威を持つ人」に焦点をしばって、そうした考え方を支える属性を分析することにした。

例によって、数量化Ⅱ類の手法を用いて、分析を試みたが、「権威のある人になりたい」という意味を支える属性は、表21のように、まず「友だちづきあいをしたい」次いで、「将来の職業」以下、「性」、「学年」、「数学の成績」の順位であった。この内、性別については、女性より男性の方が、そして、学年では、これまでのデータから考えて、二～三年生より一年生の方が、「権威のある人」への願望が強いと思われるが、カテゴリーの反応を考慮して、アイテム・カテゴリーの構造を示したのが、図13である。

表20 「将来の生き方」の相関係数

	力を合わせて	尊敬され	人に好かれる	金持ち	有名な人	のんびり
社会に役立つ人になる	★ 0.552	★ 0.527	0.257	0.213	0.166	0.028
力を合わせて社会を良く		★ 0.427	0.379	0.150	0.090	0.072
尊敬され権威を持つ人			0.357	0.340	0.208	0.058
人に好かれる人				0.162	0.146	0.192
金持ちの人					0.363	0.215
テレビに出る有名人						0.167

★>0.40

図12 「将来の生き方」の相関略図

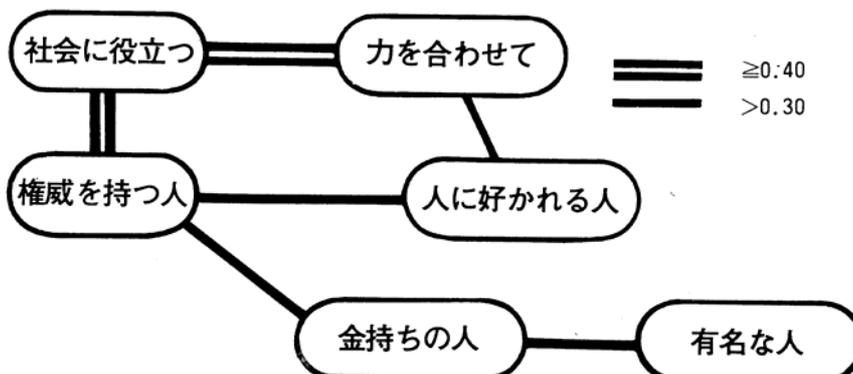
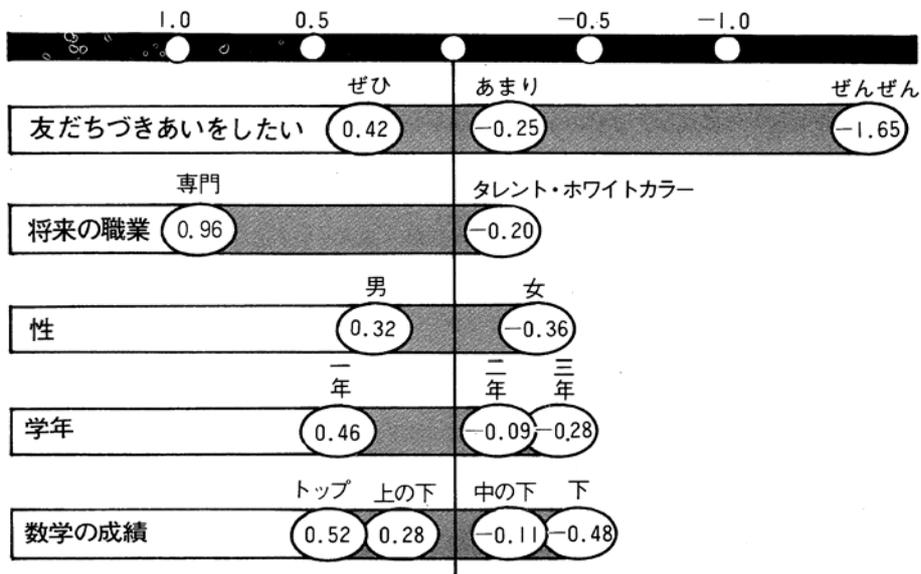


表21 「権威のある人になりたい」の偏相関係数

順位	ア イ テ ム	係 数	順位	ア イ テ ム	係 数
1	友だちづきあいをしたい	0.1452	8	英語の成績	0.0699
2	将来の職業	0.1333	9	ゆっくり寝てみたい	0.0697
3	性	0.1268	10	深夜のラジオを聞きたい	0.0657
4	学 年	0.1132	11	クラブの有無	0.0492
5	数学の成績	0.1057	12	学習塾の有無	0.0462
6	予習や復習をやりたい	0.0994	13	社会科の成績	0.0456
7	遠足や修学旅行の楽しさ	0.0701	14	休み時間の楽しさ	0.0205

図13 「権威のある人になりたい」の 카테고리・スコア



今までの分析と同じように、中央の直線より、左側が、「権威のある人になる」を促進する要因、右側が、そうした意欲を衰退させる要因である。そして、左側のカテゴリーの中から、カテゴリー・スコアの大きな順に、「権威のある人」への意欲を促進する要因をあげると、なによりも、「将来、専門職へつきたい」という意欲の持主で、学業成績の良い一年生で、友だちづきあいの好きな男子であった。具体的に言えば、将来の医師を志し、数学の成績がトップ層の男子というところであろうか。逆に、権威への達成を回避している生徒は、友だちから孤立し、成績も不振ぎみの高学年の女子ということになる。

なお、数量化のカテゴリー・スコアは加算できるから、「専門職志向 (0.96) の数学の成績がトップ層 (0.52) で、一年生 (0.46) の男子 (0.32)」のスコアは、2.26。この内、「専門職志向 (0.96) は変わらないが、数学の成績が上 (0.28) の三年生 (-0.28) の女子 (-0.36)」のスコアは0.60となる。

このように、権威への傾斜は、個々の生徒のさまざまな属性により異なるが、総じていえば、達成意欲が強く、成績の良い生徒たちが、「社会的に尊敬され、権威のある生活」を目指した毎日を送っている。それに対し、成績の不振ぎみの子は、権威への達成を断念している。

3 のんびりした生き方へのあこがれ

それでは、「権威を持つ」と対照的な「その日その日を、自由に楽しく過ごしたい」を支える属性を考えてみよう。

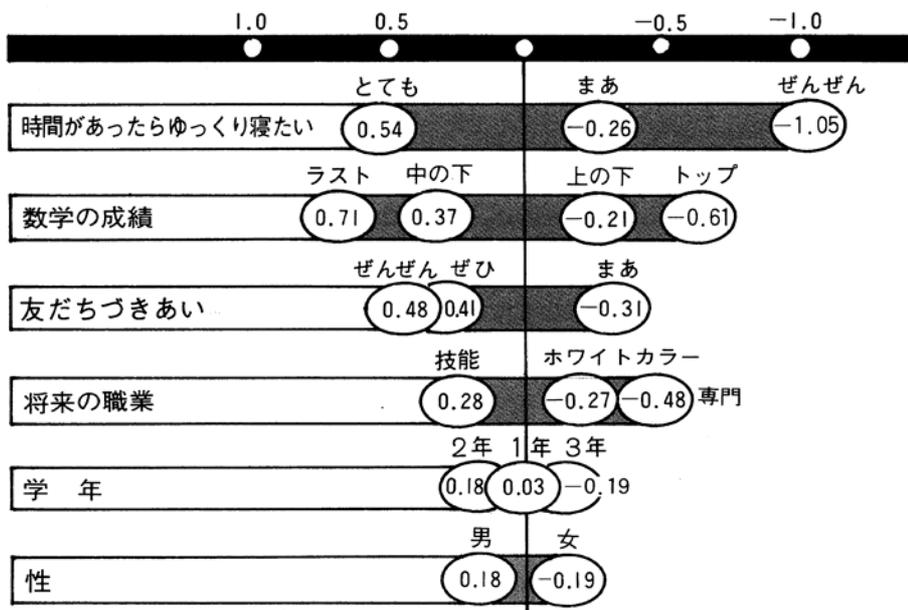
表22に、12のアイテムの持つ重みを、偏相関係数の形で示したが、説明力の大きなベスト4は、「時間があつたらゆっくり寝たい」、「数学の成績」、「友だちとつきあいたい」「将来の職業」の通りであった。今までの分析から考えられるように、「ゆっくり寝たい」と思っている生徒は、当然「大きくなったら、のんびり楽しく過ごしたい」と考えているであろうし、数学の不振ぎみの生徒も、のんびりとした生活にあこがれているのではなからうか。

例によって、図14に、表22の12のアイテムの中から、6つを選んで、各カテゴリーの反応を示したが、これによると、「将来、のんびりとした毎日を過ごしたい」と考えている生徒の属性は、①数学の成績不振、②時間があつたら寝たい、③友だちづきあいをしたく

表22 「その日その日を、自由にのんびり楽しく過ごしたい」の相関係数

順位	アイテム	係数	順位	アイテム	係数
1	時間があつたらゆっくり寝たい	0.1924	7	クラブ活動	0.0852
2	数学の成績	0.1568	8	性	0.0770
3	友だちとつきあいたい	0.1534	9	学習塾	0.0754
4	将来の職業	0.1255	10	学年	0.0673
5	社会科の成績	0.1068	11	遠足が楽しみ	0.0593
6	英語の成績	0.0998	12	休み時間が楽しみ	0.0554

図14 「のんびり過ごしたい」のカテゴリー・スコア



ない、④将来の職業が技能職、⑤二年生、⑥男子などであり、逆に、「のんびりとした生き方」に反発しているのは、①「時間があっても寝る気がしない」、②数学の成績がトップ、③ほどほどの友だちづきあい、④専門職志向、⑤三年生、⑥女子などであった。したがって、先ほどの分析に使った「専門職志向 (-0.48)、数学の成績がトップ層 (-0.61) で、一年生 (0.03) の男子 (0.18)」をモデルとするなら、「のんびりとした生き方」に、-0.88と、強い反発を示している。こうした属性の持主の「社会的に尊敬され権威のある生き方」に対するカテゴリ・スコアが2.28であったことを想起すると、当然のことながら、「権威」と「のんびり」は、相対立する生き方なのであろう。

念のため、「自由にのんびりとした生き方」にあこがれる生徒のモデルを作るなら、「時間があったらゆっくり寝たいと考えている (0.54)、数学の成績が下位の (0.71)、友だちづきあいのない (0.48) 技能職志向の (0.28)、二年 (0.18) の男子 (0.18)」である。こうした属性を持つ生徒ののんびりに対するカテゴリ・スコアは、2.37である。なお、上記の属性を持つ生徒の、「権威のある人」に対するスコアを計算すると、-0.71となる。

つまり、学業成績は、現在の意識を規定しているだけでなく、未来の意識に対しても、強い影響力を与えていた。つまり、学業成績に自信を持つ生徒たちは、現在の自分に自信を持つだけでなく、将来、社会に役立つ仕事をして、社会的に尊敬される人間になることを目指した毎日を送っている。それに対し、学業が中以下の生徒は、社会的な達成を断念して、せめて、のんびりとした生活を送ろうとする。学業成績が、こうした機能を果たす要因のひとつは、すでにふれた図3のように、成績が努力に比例するという見方であろう。すなわち、学習努力の成果が学業成績に反映されると生徒たちは考えているから、成績不振の生徒は、自らの努力不足を感じざるをえない。もう一度、8ページの表4へ戻るなら、成績に自信のある生徒は全体の1割——「上の下」を含めて3割——にすぎないのである。したがって、少なめに見つめて、7割——厳密に考えるなら、9割——の生徒は、そうした自己に対する不信に陥っているのである。

V章 まとめにかえて



1 意欲喪失の背景

近年、青年たちが意欲を喪失したという論調が目立つ。芥川賞作家、三田誠広氏は、「僕って何」や「赤ん坊の生まれない日」などの作品を通じて、自己の存在すらも、不確かに思う青年像を描いている。

三田作品以前に、若者の生き方を象徴的に描いたのは、庄司薫氏の一連の「薫くん」シリーズだといわれる。「赤頭巾ちゃん気をつけて」や「白鳥の歌なんか聞こえない」で知られるこれらの作品の主人公は、一見、無気力な生活を送っているが、青年らしいナイーブさを内に秘め、自分の世界をかたくなに守ろうとしている。ただ、無神経なおとなたちが、自分の世界へ侵入するのを防ぐために、表面上ニコニコと笑い、無抵抗の姿勢をとっているのにすぎない。もちろん、彼らのいう世界が、私生活に限定され、社会的なひろ

がりを欠くのは事実だが、それなりの主体性を持っているのはたしかであろう。

司馬遼太郎氏の「坂の上の雲」には、松山を舞台として、秋山兄弟や正岡子規などの青春群像が登場する。彼らは、個人の努力、そして立身出世の延長上に、社会の発展を考えることができた幸福な世代に属する。しかし、日本の近代化が進むにつれ、社会のひずみが露呈されるようになると、個人の達成目標と社会的な価値との間に微妙なずれが生じてくる。そうした若者の姿をあらわにしたひとつの事例が、石原慎太郎氏の「太陽の季節」であろう。あの小説の主人公は、エスタブリッシュメントに対する反抗という形で、若さを発揮している。

しかし、三田作品の主人公は、自分から働きかけることもなく、環境の推移とともに、風の中に間に、受身の行動をする若者にすぎない。そうした受容形人間を、オプローモフと呼ぶことがある。ロシアの作家・ゴンチャロフの同名の小説の主人公であるオプローモフは、貴族の家に生まれ、何不自由ない生活を送る。そのうち、なにかをしようという意欲を失って、ベットの中で半日をすごすようになる。彼は、周囲の人に対する思いやりや鋭い批判の目は持っている。しかし、そうした意識が行動化されないのである。

ここで問題となるのは、かつては、大地主や貴族のような、ほんの一握りの若者の間にしか認められなかった「オプローモフ病」が、現在では、津々浦々の若者をとらえたという事実であろう。本調査の結果でも、7割を越える生徒たちが、勉強に背をむけ、のんびりと、その日その日をすごす生活にあこがれていた。

もちろん、現代の青年たちの意欲喪失の背景は、さまざまであろうが、物質的に豊かな社会の到来が、やる気の喪失に拍車をかけたのは確かであろう。現代の中学生は、東京オリンピック前後に生を受け、幼稚園時代に大阪万博を迎え、再放映の「ウルトラマン」や「オバQ」を見ながら育った世代である。彼らは、経済の高度成長期の申し子であるから、欠乏感を味わった体験を欠く。すべてに満ち足りた生活に慣れ、努力をする必要はないのである。

こうした文脈で、意欲の減退を考えていくと、これは、文明化社会の子どもの悲劇であり、大きくとらえるなら、個々の学校の努力を越えた社会のあり方そのものに、小さく言えば、家庭でのしつけに、主たる原因を求めねばならないだろう。しかし、本調査結果からいえるのは、学業成績が、ただでさえ衰退しがちな生徒たちの意欲を、決定的に衰退させる契機となるという事実であった。

2 学校再生の道を求めて

学校が、生徒たちに、知識や技術を伝達するのを、主たる使命として成立しているのは論をまたないが、本調査を通じて、くり返し、提示されたデータは、学業が順調に進んでいる者を除いて、生徒たちが、学業に自信を喪失し、友だちとの雑談やクラブ活動に生きがいを見いだそうとする傾向であった。

もちろん、学校は、学習のみで成り立つ機関ではないから、友だちとのふれあいやクラブ活動が、固有の意味を持つとしても、そのこと自体を、問題視する必要はないかもしれない。しかし、従来の学校論の中で、副次的な機能とみなされてきた「生徒文化」に、生徒の関心が集中し、ふれあいそのものが、学校の主たる機能と化している現在の姿は、やはり病理状況としてとらえねばならない。しかも、そうしたふれあいは、表1に、その一端が示されているように、生徒間の交流に限られ、教師と生徒との関係は断絶している。さらに、本調査では、それ以上の分析を試みていないが、筆者の実施した一連の子ども調査のデータによれば、生徒たちの望むふれあいは、いわば、願望の世界にとどまり、現実にはふれあいの充足感を味わっている生徒は、少数にとどまっている。

つまり、一握りの生徒たちは、いわゆる良い高校、そして、一流大学を目指して、疲れた体をむちうって、勉強に励んでいるが、その他の生徒は、学年が上がるにつれて、クラブをやめ、良き友も得られないまま、目標を喪失した毎日をすごしている。

こうした生徒の状況に、学校は、それなりの救助策をとれないのであろうか。「脱学校論」で知られるベライター C. Bereiter は、「教育のない学校」(下村哲夫訳 学陽書房)の中で、学校の機能として、知識や技能の伝達と態度の形成とをあげ、前者の「訓練」と、後者の「世話」とに、教育組織を二分するように提言している。

さらに、イリッチ I. Illich は、「脱学校の社会」(東・小沢訳 東京創元社)の中で、「子供は学校に所属する。子供は学校で学習する。子供は学校でのみ教えられる」というような前提に立脚した現代の学校は、死滅の時を迎えていると指摘している。イリッチは、さらに論旨を発展させ、教育を生涯学習の観点でとらえ、社会を学校化する必要を説いているが、そこまで、視野を拡大しないまでも、ベライターにせよ、イリッチにせよ、学校が機能過重にあえいでいるとみなしている点では共通の基盤に立脚している。

このところ、欧米の学校事情を紹介した好書の刊行が続いている。「世界の小学校で」(白馬出版)、「学校は生きている」(ゴマ書房)、「イギリスと日本」(森嶋通夫著 岩波新書)などが、その一例である。

そうした著作を読むと、入学式、学芸会、修学旅行、安全教育、学校給食など、日本の学校なら、通例、行われているそうした広義の教育活動が、学校教育のなかから、除外されているのに気づく。つまり、欧米の学校は、日本の学校より、はるかに守備範囲を学習活動に限定している。そうした学校でも、脱学校論の台頭がものがたるように、機能の過重に悩んでいる。

周知のように、日本の学校は、急速な西欧化を図る窓口として出発した。そのため、土着の文化と断絶した形で、教育と名のつくすべての機能を吸収しながら、学校としての地位を確保してきた。いわば、そうした急速な近代化のつけが清算されないまま、現代を迎えたといえなくもない。

論点をやや広げすぎたかもしれない。焦点をしぼろう。総合デパートのように、すべての機能を内に含んだ学校は、どの機能すらも果たしえないのである。そうであるとしたら、学校の機能を縮小し、学校の守備範囲を明確にする必要がある。

そうした学校改革の一つの方向として、生徒たちの望むようなふれあいの要素を強めることが考えられる。学習の進路をやや遅くし、いわゆる落ちこぼれの発生を最小限にいとめながら、クラブ活動や話し合いの時間を増加させる方法である。

生徒たちの精神的な充足を狙いとした「社会福祉型学校」の誕生である。現在の教育課程改革は、そうした方向へ推移しているが、この動向は、初等教育では可能としても、中学校の場合、いくつかの隘路につきあたらざるを得ない。

まず、マクロにとらえた時、これは、教育水準の低下を招く。わが国のように、資源に乏しく、技術水準の高さに、その存続を依存している社会にあって、教育水準の低下は、社会の存続すらも危うくする。また、現実の社会の中に学歴主義が残存し、学歴取得が一定の資格確保に通ずる以上、より良い資格を獲得するための学歴取得競争が生ずるのはやむをえない。そのさい、学校が、社会福祉型の平等の理念を求めようとするなら、学校以外に、なまの教育期待に添う教育組織が発生し、「ふれあいと平等」を主とする理念追求型の第一の学校と、「学力取得のための能率化」を看板に掲げる現実埋没型の第二の学校とに教育機能が二分されよう。さらに、知的な可能性は、個々の生徒により多様であるから、当然、学習の進むにつれて、学力差が生じてくる。そのさい、最後のひとりを救うことは、理念としてはありえても、現実には、学習進路の著しい停滞を招く。

このように、社会福祉型学校の誕生には、さまざまな隘路が予想されるのは事実だが、

そうかといって、学校が、学業成績を唯一の尺度として、生徒たちを淘汰する選抜機関として機能するのにも、多くの問題が残ろう。現代の学校では、淘汰機能はあらわにされていないが、そうした段階でも、本調査によれば、多くの生徒たちの自我像はゆがんでいた。

となると、学校改革の道はいずれにせよ、けわしいといわざるを得ない。冒頭でふれたように、6・3・3制の学校制度は、戦後の社会に定着した数少ない優れた機構のひとつであろう。しかし、30年を経た現在、制度としての単線型の理念があまりにも優先し、運用面において、画一化の傾向が強まる印象を受ける。

家庭教育、企業内教育、あるいは、成人の自己学習などに象徴されるように、元来、学校以外にも、教育機能を営む組織は、社会の各層に存在している。まして、情報化社会を迎えた現在、テレビや雑誌を始め、数多くの教育媒体が増加している。つまり、学校は、もはや教育権を行使する唯一の社会機関ではないのである。そうだとするならば、学習を、生涯教育の観点でとらえ、OECDのいう「リカレント・エデュケーション」の発想を重視すべきであろう。スウェーデンなどの大学入試にあたっては勤労年数や社会教育施設での研修などが、学校の授業と同等の重みで、単位化されると聞く。また、ハーバード大学など、アメリカの大学でも、クラブ活動のリーダーシップ、趣味領域での特技などが、学業成績と同じように、ポイントの対象となるといわれる。

こうした発想の延長線上に、いわゆる「バウチャー制」（教育切符制）が位置しようが、日本の現状では、実現への道が遠いとしても、教育を生涯の角度でとらえ、学校以外の教育機能を認めると同時に、学校の内部にも多様な価値を存在させる構想は、わが国にも、示唆にとむ面が多い。

従来の学校では、ともすると、社会から隔離された断片的な知識の取得量によって、生徒を評価しがちであった。そのため、記憶力に優れ、型にはまった学習の得意な生徒は、生き生きと生活できる反面、応用の才や創造性、努力の蓄積、友情のあつさなどの属性は軽視される傾向が強かった。

平等の尊重とは、いうまでもなく、すべての生徒を画一的に扱うことではあるまい。多様な価値を認め、個々の個性を尊重する教育は不可能なのであろうか。学業成績の良い子も、それなりの生き方なら、成績が多少悪くとも、クラブでリーダーシップを発揮する子、あるいは、音楽面で抜群の能力を示す子、それぞれの個性を尊重する多面的な教育の実現を望みたいのである。

長い生涯にとって、学業成績は、たまたまある側面に限定して測った尺度なのであるから、人が生きるために、その他の多くの尺度が存在しよう。そうした発想をふまえた多様なプログラムが、中学校でも必要ではないのか。選択制の導入と同時に、授業以外の教育活動の重みを増加させるのが、その具体例とならうか。学校のもつ閉鎖的な性格を改めて、学校を開かれた社会とする試策が望まれてならない。

調査票見本

これはテストではありませんので、あなたの思った通り書いてください。

I まず、学校での生活についておたずねします。

①以下に、学校生活のいろいろな場面が書いてあります。それぞれの楽しさは、どの位ですか。あなたの思った通り、○をつけてください。

	とても 楽しい	かなり 楽しい	まあ 楽しい	ほんぶん ほんぶん	まあ 楽しくない	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない
1. 英語の授業	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
2. 休み時間	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
3. 生徒会や学活	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
4. 数学の授業	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
5. 期末テスト	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
6. クラブ活動	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
7. 先生との会話	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
8. 運動会や文化祭	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
9. 遠足や修学旅行	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
10. 友だちとの雑談	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						

②あなたの勉強の成績は、クラスの中でだいたいどの位だと思えますか。

	1～2番	4～5番	10番位	まん中位	うしろから 10番位	ぐんと うしろの方
1. 国語	----- ----- ----- ----- ----- -----					
2. 社会科	----- ----- ----- ----- ----- -----					
3. 理科	----- ----- ----- ----- ----- -----					
4. 英語	----- ----- ----- ----- ----- -----					
5. 数学	----- ----- ----- ----- ----- -----					
6. 音楽	----- ----- ----- ----- ----- -----					
7. 美術	----- ----- ----- ----- ----- -----					
8. 技術または家庭科	----- ----- ----- ----- ----- -----					
9. 保健体育	----- ----- ----- ----- ----- -----					

(40人のクラスとした場合)

③それでは、あなた自身の気持ちとしては、勉強の成績がどの位になれば良いと思っていますか。

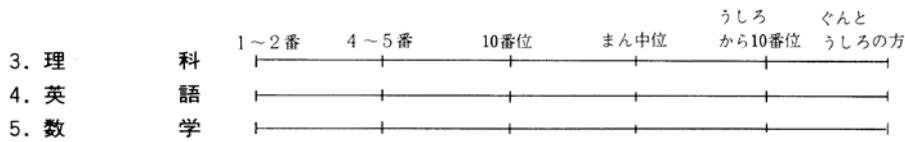
	1～2番	4～5番	10番位	まん中位	うしろから 10番位	ぐんと うしろの方
1. 国語	----- ----- ----- ----- ----- -----					
2. 社会科	----- ----- ----- ----- ----- -----					
3. 理科	----- ----- ----- ----- ----- -----					
4. 英語	----- ----- ----- ----- ----- -----					
5. 数学	----- ----- ----- ----- ----- -----					
6. 音楽	----- ----- ----- ----- ----- -----					
7. 美術	----- ----- ----- ----- ----- -----					
8. 技術または家庭科	----- ----- ----- ----- ----- -----					
9. 保健体育	----- ----- ----- ----- ----- -----					

(40人のクラスとした場合)

II 次に、学校以外のことについておたずねします。

①1日が25時間となり、もう少し時間の余裕が生まれたら、あなたは、その時間をどんなことに使いたいと思えますか。

	ぜひ やりたい	まあ やりたい	なんとも いえない	あまり やりたくない	ぜんぜん やりたくない
1. 予習や復習に、その時間を使いたい。	----- ----- ----- ----- -----				
2. もっとテレビを見たい。	----- ----- ----- ----- -----				



②次に、4つの勉強の仕方が書いてあります。英語や国語の成績を良くしたいと思ったら、どの方法が良いか、1位～4位まで順位をつけてください。

- A 通信教育の教材などを活用して、力をつける。
- B 学習塾を有効に利用して、力をつける。
- C 家庭教師の人に来てもらい、力をつける。
- D 参考書などを利用しながら、自分ひとりで力をつける。

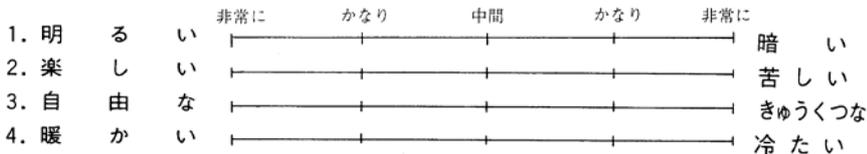
	1位	2位	3位	4位	
① 英語を勉強する時					(1位から順に、A～Dの記号を入れてください。)
② 国語を勉強する時					
③ 理科を勉強する時					

③次に、家庭での勉強のやり方が書いてあります。あなたの勉強の仕方は、どのタイプに入りますか。①～③の教科ごとに答えてください。

- A 予習に重点を置いて勉強して、学校の授業はまとめをかねて聞く。
- B 予習はほとんどせずに、復習に重点を置いて勉強をする。
- C 予習や復習をほとんどせずに、テストの前に集中して勉強をする。

① 英語を勉強する時	-----	(A～Cの記号を入れてください。)
② 国語を勉強する時		
③ 理科を勉強する時		

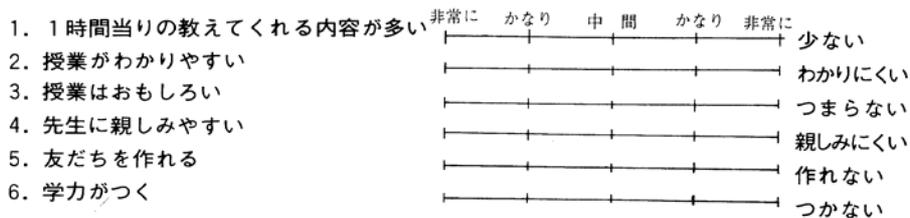
④学習塾という言葉を知ると、どんな感じがしますか。



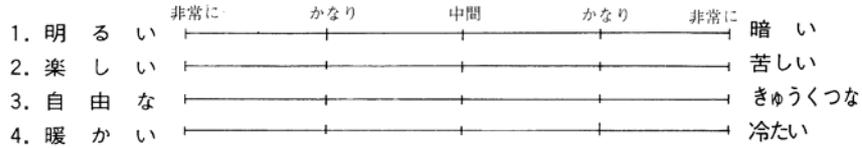
⑤学習塾へあなたは通っていますか。

学習塾へ	通っている	通っていない	(どちらかに○をつける)
	↓	↓	
	通っている人	通っていない人	
	・週に()回	・今まで通ったことは	
	・いつから	ない 有る (どちらかに○をつける)	
	小, 中 (どちらかに○をつける)	・これから通うつもりは	
	()年生から	ない 有る (どちらかに○をつける)	

⑥学習塾での勉強というと、あなたにはどんな感じがしますか。



⑦ 次に、家庭に教材を送ってくる、通信教育についてお尋ねします。通信教育という言葉を聞くと、どんな感じがしますか。



⑧ あなたは、なにか通信教育（あるいは添削教育）を受けたことがありますか。

1～3のどこかに○をつけ、それぞれに教えてください。

1. 通信教育を受けたことはないし、現在も利用していない。

1) 今後も利用するつもりは ない ある (どちらかに○)

2. 今は通信教育を受けていないが、昔、利用したことがある。

1) 利用した時期 昭和()年の()月頃から()年()月頃まで

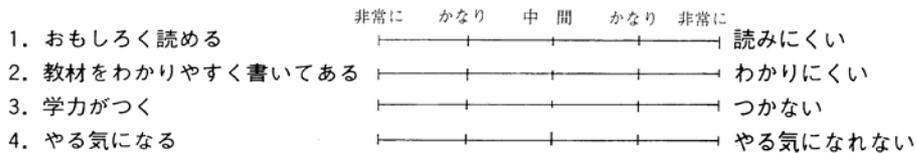
2) やめた理由を書いてください。

3. 今、通信教育を受けている。

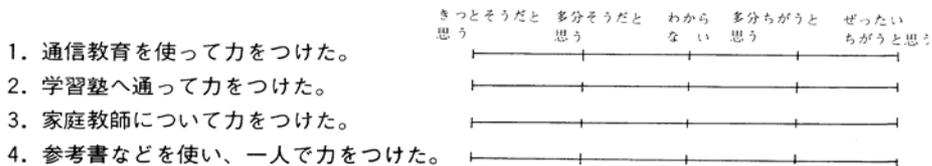
1) いつから利用していますか。 昭和()年の()月頃から

2) 利用してから、学力が ついた つかない (どちらかに○)

⑨ 通信教育というと、あなたはどんな感じがしますか。



⑩ 英語や数学がとてもよくできる友だちの場合、どんな勉強をして力をつけたと思いますか。



⑪ あなたが住んでいる家の近く（通える範囲）に、学習塾はいくつぐらいありますか。

⑫ いろいろな通信教育がありますが、次の中であなたの知っている通信教育の番号に○をつけてください。

1. A社 2. B社 3. C社 4. D社 5. E社 6. F社 7. G社 8. その他

IV 最後に、あなた自身のことをおたずねします。

1. あなたは 中学()年 (男・女)

2. 学校で、なにかクラブに入っていますか。(あてはまるものの記号に○をつける)

1) 入っていたが、今はやめている。

中学()年の()月から、中学()年の()月まで、()クラブに入っていた。

2) 今、クラブに入っている。()クラブ

3) クラブに入ったことはない。